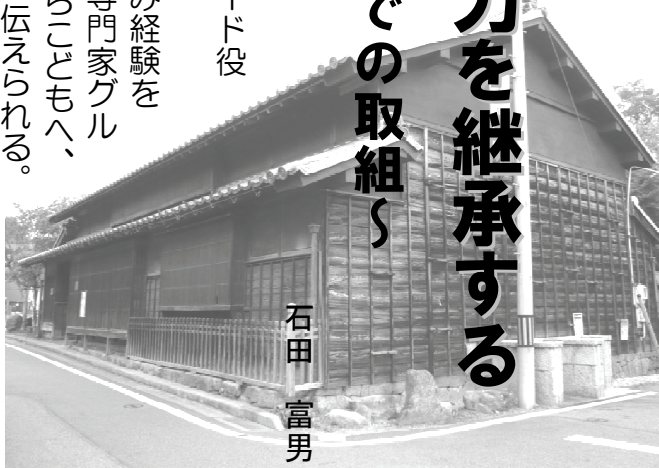


# 文化財建造物の魅力を継承する

## 岡崎市旧石原家住宅での取組

愛知登文会の特別公開でこどもたちがガイド役を務めた旧石原家住宅。  
昨年度のこども文化財体験事業の取り組み経緯を踏まえ、所有者の想いとそれを支援する専門家グループとの連携によって実現した。大人からこどもへ、そしてこどもから大人へ。古民家の魅力が伝えられる。



石田 富男

### 旧石原家住宅

石原家は米穀業、金融業を本業とする商家で、六供町杉本の庄屋を務め、明治維新後は戸長を務めていた。岡崎城の北東に位置し、岡崎城下を結ぶ古くからの幹線道路に面している。岡崎市の中心部は昭和二十年の空襲でほとんどが焼失してしまったが、石原家に延焼が及ぶ直前に風向きが変わり焼失を免れたという。そのおかげで江戸後期の建物が残され、妻側は大壁の漆喰塗りの上に下見板張り、北面は太格子と出格子という印象のある外観となっている。

居住者が死亡した後、相続した現所有者がこの建物を気に入り、建築当時の造りを復原。一時料亭として活用していたが、現在は離れの一部が事務所として利用されている以外は空き家となっている。

### こども文化財体験事業

この石原家の保存・活用を進めている活動グループがある。メンバーは所有者の他に建築士、庭師、市民活動家、行政マン。月一回新月の日に集まるので「つきいち」と称している。

昨年度は愛知登文会のこども文化財体験事業をこのグループの協力のもとに実施。ボーイスカウト岡崎第八団に参加を呼びかけ、二〇名のこども達が石原家で昔の暮らしを体験した。  
最初に所有者から昔の暮らし方について話を聞いた後、草履ばきを体験。戸の開け閉め、井戸のくみ上げ、昔の掃除道具をつかっの掃除、さらにはかまどを使ってご飯とトン汁づくりを体験。子ども達は普段できないことができたことを面白く感じるとともに、隠し階段や雨戸の仕組みなどに関心を示していた。



こども文化財体験事業  
かまどでご飯とトン汁づくり

### こども文化財ガイド事業

こども文化財体験事業が単発の受動的な取り組みに対し、こども達の主体的な取り組みとして位置づけているのがこども文化財ガイド事業である。ここの取組は愛知登文会として四力所目となる。この実施にあたってはつきいちの会で企画立案。三回のプログラムの中で建物の魅力を体験し、学び、そしてガイドする。こども達の主体性が求められることから参加者は小学校を通じて公募。小学校四〜六年生十四名が応募してくれた。初日はまち歩きから。東海道から路地を巡り、石原家がどんなまちに建っているのかを知る。戸締りがされた住宅の鍵を開け、真つ暗な家へ。皆で手分けして雨戸を開ける。隠し階段から二階へ。なぜ階段を隠しているのか。皆の関心が集中する。庭では井戸水のくみ上げを体験。二日目は前回教えてもらったことを思い出しながら、石原家住宅の特徴をまとめた「虎の巻」で学ぶ。大きく五つの魅力に整理でき、五つのグループに分かれてガイドを担当することに。それぞれのグループにつきいちのメンバーが付き、どんなふうにガイドするか作戦会議。クイズを考えるグループも。

### 特別公開でこどもたちが案内

三日目が愛知登文会特別公開の日。午前の案内をこども達が担当。あいにくの雨天であったが、百名を超える来訪者があった。日頃この前を通る人もどんな建物か以前から気になっていたようだ。学んだことを必死で伝えようとするこども達。こども達の解説に感心する大人達。逆に知らないことを大人から教わり、解説に付け加えるこどもも。古民家の魅力が受け継がれていく。このこども達が大人になった時、石原家はこうなっているだろうか。



こども文化財ガイド事業  
井戸について説明するこども達

## 謎のやぐら

日本初の長距離電話を支えた遺構

堀内 研自

こんな文化財もあります！



旧豊川電話装荷線輪用櫓 高さ約6m

畑の真ん中に立つ鉄筋コンクリートの櫓。れっきとした登録有形文化財である。これは昭和三年（一九二八）に東京〜神戸間に開通した国内初の長距離市外電話の施設の一部で、装荷線輪という設備を設置するための櫓である。装荷線輪とは音声電流の減少をおさえ伝送効率をよくするためのコイル状の機器で、約一八〇〇mごとに設置された。

この櫓、一般の方が所有しておりその方にお話しを伺った。所有に至る経緯は、櫓の前にパイパスが通る計画があったため、広告塔としての活用を見込み競売で落札する。しかし、パイパスが出来てみると車道からは十m以上離れてしまったため、広告塔としての価値は低いことが判明。周辺が畑であるため、草取りなどの手入れをしないといけないが、税金も低廉であり、古いものを大切する性分から、現在も大切に櫓を所有し続けているとのことである。その後、二〇〇七年に近くの旧豊川電話中継所と同時に有形文化財の登録を行う。所有者はこの櫓にとっても愛着があるようで、今回の特別公開では、見学者に自作の資料とともにこの櫓の解説を熱心に語る姿が印象的だった。話を聞いているうちに私も興味湧いてきた。調べてみると、初期の装荷線輪用櫓は

全国に三百以上作られたはずで、その内のいくつかは今でもひっそりと残っている。文化財として登録されたのは豊川の櫓だけであるが、他にも、豊橋、静岡、三重などで存在していることが分かっている。調べるうちに、偶然にも私の実家の近くの東郷町に似た櫓を見つけた。細部が豊川のもと同じで、位置も当時の電話線の経路である豊川中継所から名古屋通信局間の直線上にあることから、当時の櫓の可能性は高い。こちらは、柱が斜めになっていて、高さが豊川より高く筋交いが二段になっている。周囲は住宅密集地で、奇跡的に小さな畑の中に建っている。すぐ横に所有者の家が見つかったので、お話を伺った。その方によると、正確な建設時期は分からないが自分の生まれる前（七十年以上前）からあるそう。で、おじいさんは通信省の電話設備で、軍事的にも重要な施設だったと言っていたそうだ。壊すことも考えたが、頑丈なコンクリートで作られているため、三百万円かかると言われてやめたそうだ。特にじやまになる訳でもないし、昔から櫓の位置は変わらないから、よい目印になる上に、敷地境界もはっきり主張できるので今では価値ある存在のようだ。今後、息子が家を建てるようなことがあれば、いっしょに壊してもらう可能性があるそうだが、その話しぶりからこの方も櫓に愛着があるようで、しばらくは残っている。そうである。



東郷町春木白土にある謎の櫓